

黙示録3章7-13節 「忠実な教会」

1A 聖なる、真実な方 7

2A 主に知られた行ない 8

3A 報い 9-13

1B 中傷者からの擁護 9

2B 試練の時から守り 10

3B 冠 11

4B 都での安全 12-13

本文

黙示録 3 章 7 節からです。フィラデルフィヤにある教会に対するイエス様の言葉を読みます。フィラデルフィヤは、前回学んだサルデスの町から南東、約 45 キロメートルにある町です。アッタロス朝ペルガモン、つまりペルガモン王朝の町の一つでした。ペルガモンにある教会について私たちは既にも読みましたね、それが首都で、フィラデルフィヤはその王国の一つでした。エウメネス二世という人が建設しました。弟アッタロス二世を後継者としてしました。彼のあだ名が「フィラデルフォス (Philadelphos)」であり、ここからフィラデルフィヤと呼ばれます。「兄弟を愛する者」という意味です。そして、ペルガモの教会の学びの時にも話しましたが、後に同盟国であるローマに王国を寄贈し、ローマ帝国の一部となります。大きなローマ街道が、トロアス、ペルガモ、サルデス、そしてペルガモに通じており、それゆえ通商路として栄えていました。



この町の特徴は、ヘレニズムすなわちギリシヤの前哨基地であったことです。広くて、低いところにありますが、防衛のしやすい所がありました。それで、小アジアの中で、紀元後 1390 年までオスマントルコの手には落ちなかったそうです。ギリシヤの前哨地ということで、そこにはギリシヤ文化が豊かにありました。しばしば、「小アテネ」と呼ばれていたそうです。ギリシヤ神殿や公共の建物がたくさん建てられていました。ですから、ギリシヤの神々を祭った神殿も多く、ここはぶどうの産地で、酒と陶醉の神ディオニュソス礼拝の中心地となっていました。そして、ここは地震の多いところでした、断層の真上にあつたからです。紀元後 17 年の大地震によって、この町は徹底的に破壊されました。その復興に皇帝テベリオスが援

助したので、皇帝に感謝を表して、その町は新たに「ネオカイザリヤ(新カイザリヤの意)」と、新しい名を付けました。ですから、後でイエス様が「あなたがたは、柱としよう」とか、「新しい名を書き記す」という約束を与えられますが、ここにいるキリスト者にとって、大いなる励ましと慰めになったでしょう。

1A 聖なる、真実な方 7

7 また、フィラデルフィヤにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がなく、その方がこう言われる。

イエス様は、全ての教会に対してと同じように、ご自身の姿を紹介されます。ここでのご紹介「聖なる方、真実な方」は、1章に使徒ヨハネに現れた栄光の御姿の中にはでてきません。けれども、聖なる方ということも、また真実という言葉も、旧約聖書からずっと神ご自身に使われている言葉であります。黙示録6章10節には、神の言葉とイエス様の証しを立てて、それで首をはねられた魂が叫んでいる言葉の中にあります。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさないのですか。」聖なる方、真実な方ということは、謗られ、迫害され、最後に殉教した人々にとって、欲していた神のご性質であったということです。つまり、聖なる方とは、「別たれた」という事ですが、他の全てとは別たれていて、全く悪がないということであり、「悪があるのに、どうして聖なるあなた様が裁きを行わないのですか？」ということでもあります。そして、真実というのは、誠実、忠実とも言えるでしょう。裏切らない、約束を守る、確かに愛しておられて、守り、報いてくださる、だから信頼のおける方だ、ということでもあります。後で、この教会の聖徒たちが、不信者のユダヤ人たちに中傷を受けていたことが書かれています。そうした迫害や中傷に対して、主は、「わたしは聖なる者だ、悪に対して必ず裁く。」「わたしはあなたを見捨てない、必ず助け、報いる。」ということを含めて、そのように現れてくださったのでしょう。

そして、「ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がなく」とあります。これも、1章のイエス様の姿には出てきません。確かに、七つの星を右手に持っている方としては出てきますが、ダビデの鍵ではありません。これは、イザヤ書にある神の約束から来ている言葉です、読んでみましょう。「22:20-24 その日、わたしは、わたしのしもべ、ヒルキヤの子エルヤキムを召し、あなたの長服を彼に着せ、あなたの飾り帯を彼に締め、あなたの權威を彼の手にゆだねる。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる。わたしはまた、ダビデの家のかぎを彼の肩に置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。わたしは、彼を一つの釘として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。彼の上に、父の家のすべての栄光がかけられる。子も孫も、すべての小さい器も、鉢の類からすべてのつぼの類に至るまで。」

これは、エルサレムに対する神の預言でした。王ヒゼキヤに仕える二人の側近がいました、シェブナとエルヤキムです。シェブナは、自分の報酬のことばかり、自分が老後、安泰に暮らし、荘厳な墓に入るようなことばかり考えていました。アッシリヤがエルサレムを取り囲むような危機にあったにも関わらず、です。しかし、エルヤキムは違いました。主を求め、ヒゼキヤに忠実に仕えていました。その忠実さのゆえに、ダビデの鍵が渡される約束が与えられたのです。鍵が何を意味するのか？ここに、「彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。」とあります。エルサレムという城であります。その門の鍵を持っているということは、その町の運命が彼に掛かっていることを意味していました。門は、外敵が攻め入って来る破れ口にもなりえます。日没の前に必ず閉めます。その後で遅れてやってきても、絶対に門を開けることはありません。そして日が昇れば、再び開けます。つまり、エルサレムの全権がその肩に任せられている、ということです。エルヤキムが忠実に仕える者であったので、主が彼の肩にダビデの家に関わることを任せるという約束でありました。しかし、エルヤキム個人への約束を越えて、彼はメシヤご自身についての約束へと発展しています。ダビデの家について、エルサレムについての全権を持っておられる方が、イエス・キリストなのだということです。

イエス様はこの全権をもって、教会に対して大宣教命令を行われます。「マタイの福音書 28:18-19 わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」そして、全ての国民を弟子とすることにおいて、その権威を教会が行使するようになることを、ピリポ・カイザリヤでペテロと他の弟子たちに約束されました。「マタイ 16:19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」私たちが教会として、ちょうどフィラデルフィヤがギリシヤ前哨地であったように、神の国の前哨地、宣教のため楔を打たれているような所であります。そこで、主の弟子と人々をしていく中で、主からの権威が現れるということです。そして、そこに必要なのは、主に仕えている忠実さであります。

2A 主に知られた行ない 8

8 「わたしは、あなたの行ないを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。

主が、フィラデルフィヤの信徒に対して、「あなたの行ないを知っている」と言われます。フィラデルフィヤは、スミルナと並んで叱責の言葉は与えられておらず、評価しておられる言葉だけになっています。その反面、前回読んだサルデスと次回読むラオデキヤに対しては、叱責の言葉しかあ

りません。なぜ、スミルナとフィラデルフィヤには、その行ないをほめる言葉だけなのでしょう？共通しているのは、迫害です。不信者のユダヤ人から、その会堂から中傷を受けていたということです。「見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。」とありますね。当時のローマ社会は、カイザルを神とする皇帝礼拝によって忠誠心が図られていました。「カイザルが主である」という告白が、云わば踏み絵でした。それをすることができないのは、ユダヤ人とキリスト者です。主なる方のみが主であり、カイザルは人であり、人を神とすることはできない、偶像礼拝であるからです。

しかし、ユダヤ人共同体は政治的にも動き、彼らはこの言葉を告白しなくてよいように、除外してもらっていました。そこで、既に煙たい存在であったキリスト者に対して、彼らに対して会堂への戸を閉ざしたのです。キリスト者は、初めはユダヤ教の一派「ナザレ派」でありました。それから異邦人も教会の中に集い、安息日を守らなくもよいということがあり、それでユダヤ教がイエスを信じる者たちを疎外するようになっていきました。それで、自分たちの共同体を守るためにキリスト者を追い出したのです。「おい、お前がいると厄介なんだよ。お前たちのせいで、我々がローマから迫害されるかもしれないのだよ。」という理屈で、キリスト者が会堂の中に入れないようにしたのです。彼らの前に、戸が閉ざされていました。ですからイエス様が、「わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。」と言われたのです。ユダヤ人は門を閉ざしたけれども、わたしがその全権で、あなたがたには門を開けておくと言われたのです。

その「門」とは、どこに入る門なのでしょう？最後の約束に、神の聖所と新しいエルサレムに入る約束をイエス様は与えておられます。黙示録 21 章には、一日中、都の門は閉じることがないとあります(25 節)。ここの信者たちは、迫害を受けて戸が閉ざされたけれども、主はご自分の都に彼らが入ることができるように、戸を開けておく約束されたのです。ですから、私たちが神の国に入るまで困難があるけれども、それでも主は戸を開いて待っていてくださるということでもあります。

そしてもう一つの意味合いがあるでしょう。それは、「福音宣教の戸」であります。先ほど申し上げたように、教会に対してイエス様は、天地の全権を任せられました。大宣教命令において、その全権を任せられました。宣教地において、そこに入り、福音を伝える門が彼らの前に開かれているということも意味するでしょう。パウロは、コリントにおいて反対が多いけれども、むしろそれは、門が開かれていることの印であると話しています。「1コリント 16:9 働きのために広い門がわたしのために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。」そして、ここがギリシヤの前哨基地であったことを思い出してください。ギリシヤの文化、小アテネをそこに植えることによって、ギリシヤの防衛線を張っていたのですが、同じようにフィラデルフィヤの信者たちは、神の国の前哨地として、その戦いの拠点としてそこに置かれていたのです。いかがでしょうか、私たちの前にはイエス様が開かれている戸があります。ご自分のそばに、まだイエス様を知らない人がいるでしょう。その一人一人に対して、ご自分はキリストの使節、宣教者となっているのです。自分には、できないと思わ

れるかもしれません。主は自分でしろ、と仰っていません。むしろ、主の命令の下に自分を置き、主に忠実な僕として、エルヤキムと同じように、任されたことをしっかりと管理するのです。「管理者には、忠実であることが要求されます。(1コリント 4:2)」とパウロが言いました。

私たちは、この大きなイエス様の命令に対して圧倒されるでしょう。けれども、思い出してください、イエス様はつい最近、ご自分を見捨てた弟子 11 人に対して、「聖霊があなた方の上に臨み、力を受けます。そして、地の果てに至るまでわたしの証人となるのです。」と言われたのです。そして、イエス様が言われた彼らをほめる言葉に注目してください。一つは、「あなたには少しばかりの力があって」であります。二つ目は、「わたしのことばを守り」であります。そして三つ目は、「わたしの名を否まなかったから」であります。

一つ目、「あなたには少しばかりの力があって」であります。彼らは町の中では影響力が小さかったに違いありません。教会の人数も少なかったのかもしれませんが。また、社会的には貧しい人たち、下層階級の人々だったのかもしれませんが。しかし、「少しばかりの力」があったのです。ここで大事なことは、私たちにはわずかな力でもよいのだ、ということです。どんなに慰められ、励まされる言葉ではありませんか。その力が、自分たちの力ではなく、主から来ているものであるという点が大切です。どんな小さなことであっても、主の御霊からいただいた力によって、忠実に神に仕えます。自分のできることをするのではなく、どんな小さな事柄でも、主に祈り、主から知恵をいただき、力をいただき、御霊に導かれます。どんなに僅かなことでも、例えばトイレ掃除を教会で行うにしても、その掃除を主に対して行ないます。

そして、二つ目、「わたしのことばを守り」することです。これは、主が命じられていること、主が願われていること、望まれていることを、しっかりと守っている、保持しているということです。そのわずかな力でもよいのです、主のことばをしっかりと守ります。私は明日、沈黙の映画はまだ観ていませんが、小説は読みました。そこには、「信者を生かすために、踏み絵を踏むことこそが愛の行為だ」という声が聞こえます。そして、「信仰を公にしなくてよい、心で秘めていけばよいのだ。」というテーマが流れています。しかしイエス様は何と言われましたか？「マタイ 10:32-33 ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」続けてこうも言われました。「10:34-37 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」イエス様の言葉を守るのです。

そして三つ目、「わたしの名を否まなかった」であります。これは、イエス様の名を告白した、イエス様に口において忠誠を尽くした、ということだけではありません。御名には、その名誉にふさわしく、というような意味合いがあります。イエス様の名にふさわしい行ない、歩みも否まなかったということでもあります。

3A 報い 9-13

そしてイエス様は、忠実な彼らに対して、その信仰に対する報いを約束されます。

1B 中傷者からの擁護 9

9 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。

これは、先ほど話しました、不信者のユダヤ人についてのことであります。「サタンの会衆」とイエス様ははっきりと語られます。それはユダヤ教の会堂、シナゴークがサタンからのものだ、ということではなく、キリストに愛された者たちを追放し、中傷することは、その背後にサタンがいるからだということです。イエス様が、「私たちの父はアブラハムです」「私たちの父は神です」と言い張るユダヤ人に対して、「あなたがたの父は悪魔です。悪魔は初めから偽りを言い、人殺しです。」と言われました。彼らは、父祖アブラハムを誇り、神を誇っていましたが、心はイエス様に対する殺意で一杯になっていたからです。

これは他人事ではありません。悪魔は、キリストに属する者たちの、キリストへの忠誠に対してありとあらゆる中傷をしています。そうやって告発して、キリスト者が主に仕えていることがいかに悪いことであり、酷いことであるのかを、ありとあらゆる手を尽くして責め立てます。その声を聞いているので、私たちの心は深い傷を受けています。迫害は必ずしも、肉体に対して行なわれることに限りません。人の精神に対して、人の心理に対しての拷問のほうが大きいでしょう。それはちょうど、家庭内暴力、DV は、その肉体に対する暴力は一割ほどで、九割は言葉による暴力というような割合であります。正しい者を悪として、本当の悪人が被害者であるかのように善と悪をひっくり返すのです。

パウロは迫害を受けているローマにいるキリスト者に対して、何が悪魔からの攻撃であるかをよく知っていて、次のように言っています。「ローマ 8:31-34 神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神

の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただきますのです。」パウロは、主に仕えることによって、いろいろな大切なものを失ってしまうという恐れに対しては、「御子にあってすべてのものを恵んでくださる」と言っていて、その他は、「敵対」「訴える」「罪に定める」という言葉に対して対抗しています。中傷に関わることなのです。それぞれ、「神が味方」「神が選ばれた」「神が義とし、キリストが執り成しておられる」という言葉で対抗しています。

そして、迫害者というのが、本当なら神を敬っているはずのユダヤ人から来たということは大事です。神について、聖書について何も知らないローマの役人ではなく、神を知っているはず、聖書を知り、キリストを知るべきはずのユダヤ人が、自分たちを守るためにキリスト者を疎外したのです。そうです、キリストの名を知っているはずのものが、自分を守るために、主の名を守っている者たちを疎外し、自分たちの仲間ではないとすることこそ、最も強烈な迫害であります。キリスト者のそれぞれの肉の弱さを最大限に利用し、それを誇大化させ、そして信仰を全面的に否定させようとするのです。江戸時代の迫害は、転びキリシタンや伴天連がキリシタンの迫害の急先鋒となりました。第二次世界大戦中は、日本の教会関係者が迫害され、投獄されると、他の妥協していた教会関係者が、一緒になって、いやそれ以上に、彼らの信仰の持ち方や聖書信仰を貶しました。

イエス様は、「見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。」ということをされます。これは、キリスト者が神の国においてキリストの王権の中で、共に統べ治めるといことです。そして、これら迫害した者たちが神の国に入ることができず、塵を舐める屈辱を味わうといことです。先にお話した、殉教した魂が、「なぜ復讐なさらないのでですか？」という訴えに対して主がお答えになられた、といことです。彼らはずっと、これら信者たちが悪者としており、自分たちが正しいとしていましたが、それが逆転するのです。彼らが正しいとされ、彼らが間違っていたことを主が明らかにする、といことです。ですから、初代教会の時からキリスト者、その指導者は、迫害者に対して憐れみを持っていました。惨めなのは自分たちではなく、彼らのほうであると知っていたからです。たとえ自分を火あぶりにしても、彼らが永遠の火の中で苦しむことを知っていたのです。それで、彼らへの憐れみの心から彼らのためにも、イエス様と同じように苦しめられている時に、執り成しをしました。

2B 試練の時から守り 10

ですから、報いは、「自分たちの信仰がやはり正しかったのだ」ということを明らかにして下さることです。次に、「試練の時から守られる」といことでもあります。10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。

「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守った」とありますが、ここでの忍耐は、耐久力というのに近い言葉でしょう、英語では perseverance であります。難しい言葉で「堅忍」と言い

ます。困難にしっかりと耐えて、最後まであきらめないことを意味します。私たちが、この人生目標を設定する時に、「イエス様の忍耐について言ったことばを守る」ということにすればよいでしょう。

そして、「わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」と言われます。「地上に住む者たちを試みる」とは何でしょうか。これは、イエスの名を信じない者たち、いのちの書に名の書き記されていない者たちの世界のことを指しています。「17:8 地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。」後に出てくる獣、つまり反キリストを見て驚き、彼を拝むようになる人々に使われています。全世界に獣は支配するという事です。つまり、この試練は信者に与えられるいわゆる信仰の試練ではなく、彼らが福音を拒んだために、悪魔の惑わしを受ける試練、というか誘惑のことであります。「2テサロニケ 2:9-12 不法の人の到来は、サタンのお働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」

では、「全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」とはどういうことでしょうか？ 次の節に、「わたしは、すぐに来る。」と続いています。ここで「時には」と訳していますが、「時から」と訳すことのできる前置詞が使われています。そのような試練の時から守ろう、イエス様が来られて私たちをこの地上から取り上げて、天にまで引き上げる約束であると考えられます。黙示録6章から、小羊なるイエス様が災いを地上に下す患難の預言があります。その患難の時に、不信仰の者、偶像礼拝をする者、魔術をする者、不品行の者、盗む者など、悔い改めないでこれらのことを行なっている者たちに災いが下ります。神の定められた、ご自分の怒りを地上に注ぐ時です。その中で反キリスト、獣が現れ、全世界を支配するのです。こうした惑わしの時からあなたがたを守ろう、救おうということです。パウロが、神の怒りからキリスト者が救われることを話しました。「ローマ 5:9-10 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」

3B 冠 11

ですから、試練の時から守られる約束があります。三つ目の報いは、「冠が与えられている」ということです。11 わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われぬように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。

イエス様は、「すぐに来」られます。これは、「来る時には、遅れることはない。すみやかに来る。」ということです。思いがけない時に、来られます。ですから、これまでも眠っていないで目を覚ましていなさいという命令がありました。1章の学びで、「時が近い」ともありましたが、その時とは物理的な時間や時刻ではなく、「収穫の時期」というような、「機会としての時」であることを学びました。ですから、自分にはどうすることもできない、神だけの持つておられる定まった時があり、神にいつも信頼して、神を待ち望んで、それでその時が来た時にはいつでも用意ができています、ということです。フィラデルフィヤの人々には、既に、「あなたの冠」とあります。主が、信仰を全うする者たちには、義の冠や命の冠が用意されているとの約束がありますが、主がその信仰に対して栄誉と称賛を用意しておられます。その誉れを冠は表しています。

それが奪われないように、「あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい」とあります。そうなんです、既に持っているものを守るのです。これから何かを得なければいけないということではありません。キリストにある霊的祝福であります。ですから、忠実であることが要求されているのです。先にあった、三つのことがあります。少しばかりの力が与えられています、続けてその力により頼みなさい。イエス様の御言葉があります、その御言葉を守りなさい。そして、イエス様の御名です。

4B 都での安全 12-13

12 勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。

四つ目の報いは、新しい都に確かに入ることができる保証であります。救われているという保証です。ここでは先に申し上げたように、フィラデルフィヤの町のことをイエス様は意識しておられます。「わたしの神の聖所の柱」であります、この町は断層の上であり、地震が起こる度に大きな被害を受けていました。しかし、大柱はそのまま立っている場合が多いです。彼らが地震で倒れる柱を見ているなかで、自分は柱として立っていることができるという保障です。それから、「彼はもはや決して外に出て行くことはない。」とあります。これも先に話しましたように、ユダヤ教の会堂から追い出されている彼らによって、都から出されることはないというのは、とてつもない安心感をもたらします。そもそも柱となっているのですから、出て行きようがありませんね！

そして、神の都の中でイエス様のものであるという認証が押されています。「わたしの神の名」「わたしの神の都」「わたしの神のもと」とイエス様は、「わたしの」を繰り返しておられます。イエス様がこの新しい都、そして父なる神がご自身のものであることを強調し、その所有権の中であなたがたを守る、と言われているのです。「神の御名が書き記される」とは、神のものであることがはっきりと記されるということです。22章5節、新しい都にいる者たちに、「彼らの額には神の名がつい

ている。」とあります。そして、「新しいエルサレムの名」というのは、22-21 章にある天から降りてくる新しいエルサレムのことです。そして「新しい名」を書き記す、というのは、全てが新しくされたその都に住む時に、新しくされた関係の中でイエス様のものとなっているということでもあります。すばらしいですね、黙示録 21-22 章に、この都の描写が克明に描かれています。彼らがそこに入ることができるのだ、という保証を与えておられるのです。

13 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』』

私たちが、彼らと同じように主に対して、わずかな力でもそれをしっかりと守っているならば、主は私たちの前に広い門を開けておいてくださいます。それは、神の国に入る門であります。そして、イエス様の権威が任されて、イエスの御名によって人々に福音を伝える戸が開かれています。大きな力を要しません、イエス様の教会において、ただイエス様に言われることを聞いて、それに誠実に、へりくだって、忠実に従うことです。